



Title	家庭科におけるシティズンシップ教育実践の枠組みの提案：高等学校における食育の実践事例より [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	土岐, 圭佑
Citation	北海道大学. 博士(教育学) 甲第15230号
Issue Date	2022-12-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/87733
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	DOKI_Keisuke_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：土岐 圭佑

学位論文題名

家庭科におけるシティズンシップ教育実践の枠組みの提案

－高等学校における食育の実践事例より－

本論文の目的は、家庭科において家庭生活の矛盾を解決する学習の過程に、地域や社会、共同体をつくる過程を組み入れる実践の意義とその際の課題と方法を明らかにし、家庭科におけるシティズンシップ教育実践の枠組みを提案することとした。

この目的の設定にあたり、序章では、家庭科教育の課題として、高校生が社会的課題への取組も視野に入れて家庭生活の矛盾を理解し、その解決につながる見通しや展望をもって学習を進められるためには、家庭の営みとそれにかかわる社会的課題を切り離さない家庭生活の矛盾のとらえ方をさらに検討することを挙げた。この課題に取り組むために、シティズンシップ教育を取り上げ、子どもの具体的な生活と結びつけて論争的問題にかかわる学習内容を構成できる教科等は家庭科であることを確認した上で、朴木（2007）の提起に基づく、家庭生活の矛盾を解決する学習過程に、学校外の地域や社会、共同体をつくる過程を組み入れ、社会的課題への取組も視野に入れて家庭生活の矛盾をとらえることが重要だと示された。その具体的な教育の内容や方法等の検討のために望月（2012）の研究を取り上げ、そこでは家庭生活の矛盾をシティズンシップ形成と結びつけて解決する主体を形成するための公共的空間の構成にかかわる提起がなされたものの、ソーシャル・リテラシーの形成方法は教室内でのケア的关系を基軸にした社会批判に留まっていることを確認した。そのため、学校外の地域や社会、共同体をつくる過程を学習過程に組み入れる意義とその際の課題や方法を解明することが必要だと指摘した。こうした問題意識のもと、本研究で取り組むべき3つの課題（①シティズンシップにかかわる家庭科教育研究の調査を通して、家庭科教育とシティズンシップ教育との関連に関する先行研究の到達点を明らかにし、双方を結びつけるための理論的課題を示すこと、②高等学校家庭科教師への「フォーカス・グループ」を通して、家庭科教育とシティズンシップ教育を結びつけるための実践的課題を明らかにすること、③対象事例（「計根別食育学校」）の調査を通して、家庭科教育とシティズンシップ教育を結びつけるための実践的課題を解明すること）を設定した。

第1章では、前出の第一の課題に取り組むために、4つのキーワード（シティズンシップ、消費者市民、市民性、生活主体）に関する研究論文の記述内容を分析した。その結果から先行研究の到達点を確認し、家庭科教育とシティズンシップ教育を結びつけるための2つの理論的課題（①子どものシティズンシップ形成を、家庭科の授業における教育内容や教育方法、教材設定との関連だけではなく、教師がつくる授業の雰囲気・環境との関連、他者との

かかわり、学校や地域がもつ特性、子どもの学校外での生活経験との関連を含めてとらえること、②子どものシティズンシップ形成を、地域や社会、共同体をつくる実践への取組とのかかわりからとらえること)を示した。また、第1章の補節では、これまでのシティズンシップ論は他に依存しないという意味での自立を強調してきたことを踏まえ、家庭科教育研究における自立のとらえ方の分析から、家庭科教育研究における自立は、他者の力を借りる必要があることを自覚して求められるとともに、他者の要求を受け止め応答できる関係の構築を通して生活を自由に創り出すことができるというとらえ方が重要だと示した。

第2章では、前出の第二の課題に取り組むために、3名の高等学校家庭科教師を対象に4つの議題をもとにした「フォーカス・グループ」を実施した。その結果を踏まえ、家庭科教育とシティズンシップ教育を結びつけるための4つの実践的課題(①教師が、生徒のシティズンシップ形成のために、教室内での家庭科の授業だけで取り組むことに対する限界をどのような過程で意識するのか、そして、その限界をどのように乗り越え、新たな教育実践を展開するに至るのか検討すること、②学校と地域の協同が成立するための条件は何か、学校と地域の対等・互恵的な関係の構築という観点から検討すること、③第一・第二の視点を経て生まれた学習空間の特性をどのように把握すればよいか、教室における授業空間との差異は何か検討すること、④その学習空間が生徒の学びにとって有する意味は何か、生徒のシティズンシップ形成の観点から検討すること)を提示した。

第3章では、前出の第三の課題に取り組むために、対象事例にかかわる分析資料の記述内容から対象事例の展開過程をまとめ、学習課題が変化する3つの時期の実践の論理をまとめた。その上で、対象事例と家庭科教育との関連を検討し、家庭科教育とシティズンシップ教育を結びつけるための4つの実践的課題の解決に向けて示唆される視点を検討した。その検討に基づくと、家庭科において家庭生活の矛盾を解決する学習過程に学校外の地域や社会、共同体をつくる過程を組み入れる実践の意義は、高校生が、家庭生活の矛盾の解決を家庭内に留めるのではなく、他者との対話や協働によりその矛盾を規定する社会的課題の解決に取り組むことができ、高校生自身の自己肯定感を高め、地域の持続的な発展に向けた課題へ視野が広がり得ることだとした。その際、高校生と地域の大人との対話と協働に基づく自治的な学習空間の設定のためには学校と地域の対等・互恵的な関係の構築が課題となり、この課題に取り組む方法は、家庭科教師や学校と地域を媒介する役割を担う職員等を中心に地域のニーズを把握し、高校全体としてそれを受け止め理解することだと示した。また、生徒同士や生徒と教師、地域人材の間での非決定空間を通したフラットな関係構築が課題となり、この課題に取り組む方法は、衣食住にかかわる生活矛盾に対して、批判的な視点を含む生徒の思いや考えを引き出し教師や地域人材がそれに応答し、実現させる雰囲気や環境をつくることで、社会的課題に対する生徒の諦めの気持ちを生まずに見通しや展望をもって実践に取り組み、生徒のシティズンシップ形成を支えることを示した。

以上より、高校生と地域の大人との対話と協働に基づく自治的な学習空間を媒介に、高

校生が地域住民だけではなく自分自身やその家族を含めた衣食住にかかわる具体的な生活実態やニーズと社会的課題を結びつけてとらえ、社会的課題への取組につながる「家庭科におけるシティズンシップ教育実践の枠組み」を試論的に提案した。さらなる実証が必要であるものの、この枠組みに基づいた教育実践の展開により、高校生は、家庭科の授業の主題に関する各生徒や地域住民の生活実態やニーズを把握し、その背景要因を探る中で家庭生活の矛盾をとらえ、各々の生活実態やニーズを規定する地域の社会的課題に関心が向き、その課題解決に向けた自分たちと地域住民との協働の実践への取組によって自分自身とその家族や他の生徒とその家族及び地域住民の具体的な生活実態やニーズと地域の社会的課題を結びつけてとらえ、その解決のための資質や能力を高める可能性があり、この点が他教科等におけるシティズンシップ教育にはない家庭科の固有性だと提起した。